



闇夜を照らす仄かな光--大学キャンパスにて

クリスマスメッセージ ポインセチア チャブレン マーク・シユタール



毎年、12月に入ると、私たちの学校やチャペルは美しいクリスマス飾りで彩られます。貧しく低く生まれた救い主のご降誕を象徴する馬小屋のレブリカは、当校のもですが、チャペルの入口におかれていません。リース、トナカイ、ヒイラギ、ツタ、クリスマスツリーのイルミネーションもクリスマスならではの光景です。

世界中では、お祝いの季節になると決まって飾られる不思議な植物が珍しくありません。日本でも、多くの人がお正月には門松を飾ります。古来より、ヨーロッパの異教徒やドイルド教の人たちは宿り木、ヒイラギ、イチイを冬に飾り、ドイツ人は各種の常緑樹を、時には植木一本丸ごとを家の中に飾りました。このように、様々な文化や時代において、人々はお祝い事に植物を活用してきました。風習として定着しているの

で、私たちは敢えて、その植物を何故飾るのかあまり気に留めないかも知れません。今の時期、突然あちこちで飾られ、そして、年末までに瞬く間に取り払われる植物はなにか。それは、ポインセチアです。ポインセチアは14世紀のメキシコが原産と言われています。ポインセチアは、長く薬用として用いられていた歴史があります。ラテックスと呼ばれる白い樹液は、解熱の効能があると

言われています。アステカ文明では「Cuexatli」と呼ばれ、非常に珍重され、赤や紫の染料として服飾にも用いられていました。今ではメキシコ各地でもクリスマス用の植物として飾られるようになりまし

たが、その道筋が出来たのは17世紀になってからでした。スペイン語では、Cuexatliと言えは「flor de pasqua」として知られ、その意味するところは「イースターの花」です。従って、クリスマスにまつわる植物になったのは後になつていうことになりました。フランシスコ派の修道僧たちは、やがてイースターに限らず、降誕の行進のときにもポインセチアを用いるようになりました。偶然にも、メキシコでペ



ビータと「聖夜の花」の伝説が生まれたのもこの頃で、クリスマス色として赤と緑が定着していきま

す。伝説によると、ペピータと呼ばれる少女が教会で降誕の場面を見るために自分の故郷に帰ります。しかし、少女はお金がなく、礼拝で幼子イエスを捧げるプレゼントを買うことが出来ませんでした。代わりに道端の草花で小さなブーケを作りました。彼女はそんなブーケに失念していました。が、従妹の「最も粗末な贈り物であっても、そこに愛があれば、神様の目には十分なのだ」という言葉に勇気づけられました。教会に入ると彼女は幼子イエスとその道端から拾った草花で作ったブーケを捧げるとたちまちそれは美しいCuexatliまたは美しい「flor de pasqua」に姿を変えたのです。

この頃はまだ、クリスマスとポインセチアの間はごく限られたメキシコの方に伝説として留まっていた。その後2000年ほど謎めいたままでしたが、1900年代始め頃から、アメリカ各地に広まり、しだいに世界中へと波及していきました。赤と緑の鮮やかな色のコントラストがクリスマスの飾りとして好まれるのはもちろんですが、ポインセチアの花と葉の形もまた、三人の博士を幼子イエスに導いたベツレヘムの星を連想させます。葉の赤はキリストの血を、その異種として最近よく見かける白の葉は幼子イエスの純白を象徴するようになっていきます。

学校やチャペルで見るポインセチアは、生産者の温室から届いたものですが、今、ここでポインセチアの文化的背景や歴史を学ぶことができます。このクリスマスに当たり、ひと時、ポインセチアにまつわる質素なペピータの伝説に思いを馳せてみましょう。皆さん、メリークリスマス！

1900年代始め頃から、アメリカ各地に広まり、しだいに世界中へと波及していきました。赤と緑の鮮やかな色のコントラストがクリスマスの飾りとして好まれるのはもちろんですが、ポインセチアの花と葉の形もまた、三人の博士を幼子イエスに導いたベツレヘムの星を連想させます。葉の赤はキリストの血を、その異種として最近よく見かける白の葉は幼子イエスの純白を象徴するようになっていきます。

学校やチャペルで見るポインセチアは、生産者の温室から届いたものですが、今、ここでポインセチアの文化的背景や歴史を学ぶことができます。このクリスマスに当たり、ひと時、ポインセチアにまつわる質素なペピータの伝説に思いを馳せてみましょう。皆さん、メリークリスマス！



